

再現屋ドットコム！ エピソード1

再現屋、産声を上げる I

1 自己紹介

オレは文字どおり、呆氣にとられた。

ついでに呆然とした。

自分の見ているものが信じられなかった。

オレの目の前には和装の女がいる。降りそそぐ明るい陽差しを古びた傘で遮りながら、日本庭園の敷石の上をゆったりとした足取りで移動する女。時折歩き疲れたように足を止め、池の中を遊泳する鯉たちに視線を投げかける。その優雅な佇まいたたず、しとやかな所作は、女が老境にさしかかっていることを雄弁に物語っている。

——いや、違う。

女は人生の来し方を振り返るように目を細め、遙か山々を遠望する。わずかに曲がった腰には、何人もの子供たちを育て上げた母親の威厳さえ漂っている。女の背中は百万語の台詞以上に、その苦難と波乱に富んだ人生を想起させた。

たかだか三十年へらへら生きてきたオレにさえ、女の生きざまがひしひしと伝わってくるようだ。

——違う。違うのだ！

オレは首をぶるぶると左右に振った。

はつきり言おう。女はまがい物だ。

作り物。贋物。にせものイミテーション。

この女、本当は老女ではない。

しかも和服さえ今日生まれて初めて着たという。オレの後ろで着付けを担当した呉服屋の女主人が息を飲んでいるのがわかる。さつきまで目を吊り上げて和服の着こなしを女に注意していた彼女も、今は信じられないといった顔つきをしているはずだ。妖怪に出会ってもこれほど驚かないだろう。

だいいちさつきからビデオカメラを構えて女を撮影しているオレだって驚きっぱなしなんだから。

女性化けるとよく言うが、限度つてものがある。彼女は本当に妖怪なのかもしれない。しかも飛びっきりの……。

女はこちらを向いた。そして弱々しく微笑んだ。まるで我が子を慈しむように。オレはぞくりとしながら、ビデオカメラで女の笑顔を撮り続けた。

オレはこの女に出会えたことを、神に感謝……するべきなんだろうか？

そもそもオレが女と出会ったシチュエーションからし

て、とんでもないものだった。

その話をする前に自己紹介をしておこう。

オレの名前は菊池俊郎^{きくちとしろう}。大阪出身。つい数ヶ月前に誕生日を迎えて三十路の大台に乗った。だからって特別な感慨はない。たんとんとした波風のない三十年だった。

自分で言うのも何だが、オレは取り柄のない人間だと思っっている。一応何にでも興味を示すが、身に付くということがない。結局中途半端で終わるのだ。そんなオレが大学受験の際、選んだのが芸大の映像学科だった。友人はオレにこう言った。

「おまえって映画観てる時だけは別人やな」

そうなのだ。普段は平々凡々としたオレが、こと映画のことになると目の色が変わる。血相が変わる。しかも自覚がないから始末に負えない。

デートで映画を観に行ったとき、上映中のオレの過剰な反応に、女の子は引きっぱなしだった。大声出して笑うわ、椅子を騒々しく軋ませて毒つくわ、服がぐしょぐしょになるほど号泣するわ。場内が明るくなるまで女の子がいたためしがない。そのうち関西のめばしい映画館のブラックリスト（そんなものがあるのか）に載せられてしまい、ひとり寂しく自宅でビデオを観るしかなかった。

それほどオレは映画を観ていると、映像の中の世界に没入してしまう。誰しも少しはそんな経験はあるだろうが、オレの場合は半端じゃないのだ。

そんなわけで、高三の進路を決めるとき担任教師が言い放った「勉強して頭を冷やせ！」という言葉に従って芸大に進学したわけだ。単純極まりない話だが、芸大でオレは水を得た魚になった。

2 映像の日々

……例の女はいつ出てくるのかって？ ごめん。もう少しだけオレの身の上話に付き合ってほしい。

さて映像学科に進んだものの、オレは授業をサボりまくった。大学に通学する代わりに、バイト先に通勤した。稼いだ金はビデオカメラ一式を購入するとキレイに消えた。——本当は学費に充てるはずだったんだけど、そんなわけで入学金に続いて学費まで親をアテにするハメになった。

そう、オレは観てるだけに飽きたらず、我が手でカメラを構えてみたくなったのだ。手に入れたビデオカメラはS社製ハンディカム。この数年前に浅野温子のCMで

パスポートサイズと謳って大ヒットした商品だ。編集作業ができるビデオデッキとセットで中古購入したオレは、毎日いろんなものを撮影しては、喜々として編集に耽^{ふけ}つた。

作品らしきものができると、人に見せたくなくなるのが人情だ。オレは大学の映研に入部し、そこを媒介にしてあちこちの“ビデオクラブ”つまりアマチュアの映像同好会に顔を出すようになった。オレの作品は結構評判がよく、上映会の常連になった。ちよつとしたコンテストに入賞したこともある。そうなるとよけいに面白味が増し、もはや大学のことなど念頭に浮かばなくなった。

オレの作品はストーリー主体だ。起承転結があれば何でもいい。笑いが取ればなおよしだ。とはいえ頼まれるとイヤと言えない性分。親戚の子のピアノ発表会や運動会、入学式や卒業式などの撮影&編集を請け負って、ちよつとした小遣い稼ぎができるようになった。

他には、家庭で撮り溜めしたビデオテープを編集してくれという依頼も結構受けた。意外にみんな撮るだけ撮って、あとは押入の奥でカビるにまかせるってパターンが多い。オレはそんなテープの山からいい場面を選び出し、気の利いたテロップを入れて短編記録映画の体裁に仕立て上げる。するとこれがまた大好評。おかげで以後他のバイトをする必要がなくなった。

いつしかオレの名前はビデオ愛好家の間で知られるようになっていた。上映会に招待されたり、専門誌の取材を受けることもしばしば。

あるとき某映画製作会社から、ウチのスタッフと組んで映画を撮ってみないかと声を掛けられたことがある。夢のような話だ。本物の映画作りの現場に関わることができる。こんな美味しい話はない。ところがオレは何をトチ狂ったのか、断ってしまったのだ。

そのころ撮影&編集代行の仕事が軌道に乗ってきて、さばききれないほどの依頼がオレの元に舞い込んでいた。もはや小遣いとはいえない金額を手に入れることができたのだ。シビアな注文を受けることなく、好きに撮影、編集して金になる。

それに引き替え、映画撮影の現場が厳しいのは誰もが知ってること。わざわざそんなところに行けますかいな。話は流れ、オレはぬるま湯のような生活を続行した。

しかし安息の日々にも終わりはある。二留が決定するとさすがに慌てた。おまけにビデオの依頼も減りつつあった。どうやらオレは少し天狗になっていたようで、日頃の態度だけじゃなく作品にまでそれがにじみ出ていたらしい。

しかたがない。オレは一応卒業を目指して素直に勉強

することにした。しかしどうにか卒業制作を完成させたものの、今度は就職先がない。聞けばオレの天狗の噂は先に卒業した同級生たちによって広くばらまかれていたようだ。映画会社の誘いを袖にしたことも一因だろう。

結局オレは上京してアニメーション制作の下請け会社に入った。そこで来る日も来る日も動画の束を担ぎ、本社とスタジオの間を車で行き来する運び屋になった。仕事には創造性のかけらもなく、オレは今更ながら運命と我が性格を呪った。

3 別れと出会い

……あと少しだから、我慢して聞いてくれ。

別段アニメが嫌いなわけじゃない。どちらかといえば好きだ。でも一度映像の魔力に魅いられた者として、毎日ひたすら宅配便の真似事に終始するような仕事は苦行以外の何物でもなかった。それでも辞めなかったのは、いつか演出の現場に近づけるんじゃないかという甘い見通しと……女だ。

いやこの女はあの女じゃない。ややこしいが。

その頃オレはアニメーターの女と同棲していた。生活が所帯じみてくると現状への妥協も生まれ、かつて抱い

ていた映画への熱意や野望もじよじよに萎えていった。自分の才能を活かせる場がどこかにあるんじゃないかと考えることも減った。いつかこの女と結婚して平凡な人生を送るんだろうなと思う日々だった。

ところがそんなささやかな夢さえ打ち砕かれる日が来た。会社が潰れたのだ。おまけに社長が会社の金を持ち逃げした。二ヶ月分の給料を未払いのまま。失意でアパートに帰ってみると、テーブルの上に手紙が置いてあった。

『サヨナラ。とつぜんだけど田舎に帰ることになりました。元気ですね。』

同棲して一年半。一緒に暮らしていてもすれ違う毎日。どこかに遊びに連れて行ったこともない。そういえば彼女の田舎は九州だったか四国だったか。ちゃんと聞いてなかった。オレってやっぱりどこか又ケてる。

行き場も、やすらぎの場もなくしたオレはその夜、あとどなく東京の街を徘徊した。春なお遠い二月の風は肌寒かった。

午前0時をまわっても東京という街は落ち着くことがない。二十四時間営業の遊園地。世の中不景気のはずなのにこの人の多さは何だ。笑ってる奴、怒ってる奴、歌ってる奴、すましてる奴。どいつもこいつも「明日」

があるからそうやって目先の感情をあらわにできるんだろう。

オレの“明日”は消えた。オレは負け組だ。

大阪から上京して早や五年。その日その日の仕事に追われるだけの毎日で、オレは何を得た？

何もありません。一日で吹き飛ばようなモンだったんだ。

どこでボタンを掛け違えたのか。目の前を笑いながら通り過ぎる連中とオレとは、何が違うってんだらう。

オレはたまらなくムシヤクシヤした。かと言って、ひとりで酒を飲みたい気分じゃない。

午前2時。新宿の裏通りをとぼとぼと歩いていたオレは、ふと見上げた雑居ビルに目をつけた。比較的ノツポのそのビルはオレに向かって登ってこいと手招きしているように思えた。

よし、登ってやるよ。今宵限りで東京とはオサラバだ。最後の見納めに高いところから勝ち組の連中を見下ろしてやる。

ビルの裏階段を駆け上がり、オレは屋上に躍り出た。風はあったが、無数に開いた孔から漏れ出す熱がオレを暖かく迎えてくれた。

縁に歩み寄って見下ろすと、下界は思ったほど華やかに見えなかった。むしろ卑小に見えた。オレは肩すかし

をくらった気分になった。

水平線に目を向けると、月明かりに照らされたビルの群れがまるで墓場のようだった。そのときオレは唐突に、ばあちゃんを思い出した。恥ずかしながらオレはばあちゃん子だった。親父やお袋よりもばあちゃんが好きだった。数年前に亡くなった時は誰よりも号泣したものだ。

ばあちゃんが呼んだ気がする。一步前に踏み出せば、ばあちゃんのいる所へ行けるかな。

オレは屋上を囲む金網を越えると、足を揃えて目を閉じた。アリベデルさよチ東京な!!

「待ちな！」

女の声がオレの耳をつんざいた。

4 シルエット

その響き渡る声にオレはビルの縁を踏み外した。

「おわっ」

伸ばした腕で金網をつかみ、かろうじて落下は免れたが、尻をしたたかに打ち付けてしまった。あとコンマ一秒動作が遅かったらオレの体は空中を漂っていたことだろう。危機一髪。

……オレは何をしようとしてた？

声はオレに向かつて発せられたものらしい。おかげで落ちそうになったのか救われたのか判然としないが、よりによつて『待ちな』とは。懐かしのドラマでもなかなか耳にできない台詞だ。誰なんだ声の主は。

オレはゆつくりと金網に向き直ると、震える体を屋上の敷地内に押し込んだ。

心臓がまだバクバクしてる。痛む尻をさすりながらオレは周囲をうかがった。

「ホホホホホ」

声は、焼き肉のにおいがもうもうと立ち上る煙突の向こう、大きな貯水槽の上から聞こえてきた。

その人物は貯水槽のハシゴに片手片足でつかまり、月の光を背に受けて、静かにオレを見下ろしていた。

シルエツトから察するとやはり女らしい。首に巻いたスカーフが風になびいている。頭の上のツノ状のものは……猫の耳か？

「うるたえるでない。若者よ」

うるたえてはいなかったが、オレはバカみたいに口を開けて女を見上げていた。女は逆光に顔を隠したまま、よく透る声で話しかけてきた。

「青春は悩み多きものであるぞ」

オレは呼吸を整える間もないまま、息を詰めて女を観察した。芝居じみた口調で語りかけるその姿は、身長

百六十センチといったところか。スリムで均整のとれた
肢体を、体にぴったりと張り付いた服が強調している。
というかタイトツか薄地の着ぐるみのようにも見える。

女は優美な動作でハシゴを一段降りた。オレはなぜか
背筋がぞくつとした。女の動きはまるで背中に羽でも生
えているような軽やかさで、この世のモノではないよう
に思えたからだ。

オレはおそろるおそろる尋ねた。

「あの……あなたはどなたですか？」

女がもの憂げに腰を振ると、尻のあたりから細いもの
が垂れ下がった。尻尾？

「我が名は、バット・ウーマン」

そう答えると女は空いたほうの左手で宙を泳ぐ仕草を
して見せた。

「……ひよつとして『バットマン・リターンズ』の、で
すか？」

「そのとおりじゃ。よく知っておるの」

まるで酔っているような口振りだ。オレは髪をかき上
げながら、

「それって、キャット・ウーマンでは？」

「うっ」

一瞬動きが止まったが、女は言葉を継いだ。

「そうとも言う」

女は深呼吸をひとつすると、動きを取り戻した。

「そ、そちは関西の生まれではないかの？」

「ハア、大阪です。わかりますか」

「あまり訛りが出ないようじゃが」

「よく言われます。帰省すると関西弁なのに、こちらに
いると自然に東京の言葉になっちゃって。ははは。主体
性がないんです」

女はオレの返事にかまわず、

「そちのな、運気は今日から上昇するぞよ」

「ハア」

「西を目指すがよい。励むのじゃ若者よ。明日はそなた
の・も・の」

オレはハアと気の抜けた返事を繰り返した。しかし、
すっかり女の雰囲気になまされてしまい、ありがたい御託
宣、と我知らず頭を下げていた。

女はさらにハシゴを一段降りようとした。その時ズ
ルツと足を滑らせた。

5 落ちてきた女

女はあわててハシゴ段を握り直そうとしたが、つかみ
損ねて逆にハシゴを押す形になった。

女の体は貯水槽を離れ、落下し始めた。

空気をはらんだ髪がフワリと広がる。うなじあたりで切り揃えられた髪は、ネオンに照らされてそれ自体が生き物のように蠢うごめいて見えた。

しなやかに伸ばされた腕、激しく上下する胸のふくらみ、躍動感にあふれた太股やふくらはぎ。

それは一幅の絵画であり、イメージビデオに挿入された心象風景を観ているようでもあった。

オレは美しさに心を打たれていた。

何年もの間思い出すことのなかった映像への憧憬をかき立てられた。いまビデオカメラを持っていたらオレは克明に撮影しまくっていただろう。もちろん再生はスローモーションだ。夜想曲ノクターンをBGMに流しながら。

そんなことを考えていたのはもちろん一瞬の間だった。女の体が手前にある煙突の陰に消えたかと思うと、ズンという鈍い音が響いてきた。

着地した。いや落下した。

オレはようやく現実に戻った。

落ちた高さは三メートルぐらい。打ちどころが悪ければ大怪我になる。

オレは急いで立ち上がると煙突を回り込んで、貯水槽との間のせまい空間をのぞき込んだ。

女は体をさかさまにした格好で、煙突脇にある溝に頭から突っ込んでいた。

「アツ、アツ、アツ……!!」

女は大きな声で喚わめいていた。はさまった溝から抜け出そうともがいているらしいのだが、手足を振るたびに煙突をじかに触れてしまい、熱さに悲鳴を上げていた。

「だ、大丈夫ですか？」

オレは近づいて女の手をつかもうとしたが、暴れるのでうまくいかない。

「ナニしてんの、早よ上げてや！」

「わ、わかりましたから動かないでください」

オレは思いきって女の腰をつかむと、グツと引き上げた。女は毛が抜ける首が抜けると喚きながらオレの足を殴りつけたが、どうにか引き上げることに成功し、貯水槽の台座を背に、座らせた。

オレも女もすっかり汗だくになってしまった。体中から焼き肉のおいがする。オレは女の横に腰を落としたがら、その横顔を初めて拝んだ。

……そう、これが“女”との出会いだった。

髪の毛いっぱい抜けたあと眉をひそめながら、文句を口にするその顔は整った顔立ちをしていた。

目も口も大きく、深い二重瞼はハーフに見えなくもない。年齢は不詳だ。

「あのお、お怪我はありませんか？」

オレはおずおずと尋ねた。するとそれを待っていたよ

うに女はキツと振り向くといきなり怒鳴った。

「なによ、アンタのせいやで、こんな髪ぐちゃぐちゃになつてもうて。どないしてくれんの！」

その剣幕に押されてオレはうつむいた。すると女のつま先が目に入った。

「でも、そんなヒールの高いパンプスなんかで高い所に登ったりするからじゃないですか？」

「なんやの！ ワタシが悪いっちゅうん!?」

反射的に腰を引いてしまい、オレはまた尻餅をついた。さきほど打ち付けたところが疼いたが、痛みで冷静さを取り戻すことができた。

「おたくも関西のかた、ですよね？」

「そうや。それがどないした!？」

「いえ、ちよつと懐かしくて。……あの、ボクは菊池俊郎といいます」

「あ、そ」

女は拗ねた口をとがらせ、あいかわらず髪をいじくっている。

「おたくの……あなたのお名前は？」

女はようやくやくオレのほうを見た。

ビルの屋上は暗い。顔の右半分を闇に沈めたまま、女はオレをジロツと睨にらんだ。離れたビルのネオンが女の眼に反射して、地獄の釜がオレにおいでおいでしてる錯覚にとらわれる。オレはその眼光に耐えきれずに視線を外した。

そのときようやく気づいたのだが、女は黒い全身タイツで身を覆おおっていた。寒くないのか？

「アンタなにしとつたん？ あそこで」

女はオレの問いに答えず、いきなり尋問口調で攻めてきた。

「あんなビルの端っこにおつてからに。飛び降りようなんて考えてたんと違ちがうん」

「いや、あの……」

オレはイタズラを先生に見つけられた小学生みたいに肩をすくめた。しかし女の口調にトゲは感じられなかった。

「こんなトコで身投げでもしてみい。警察来る前に、財布か何から全部盗られてまうで、ストリートギャングに身ぐるみ剥はがされるかもしれへん。落ち武者狩りや。アハハハ」

女はあっけらかんと笑い出した。オレは言い返すこともできず、女の顔を見つめ返した。その目が潤んで……見えた。

オレは本当にこの高い所から飛び降りるつもりだったのか。他人が見てそう思うんだからそうなのかもしれない。ということは、オレはこの女に命を救われたってことか？

「さて、と」

女は両肩のホコリを払い、立ち上がった。いや立ち上がろうとした。しかし、アタタタと叫ぶや、姿勢を崩した。オレは反射的に女を抱きとめた。そういや女性に触れるのは一月ぶりかな、などとバカなことを考えながら。

情けないことにオレは彼女を支えきれなくて、いっしょに床の上に倒れ込んでしまった。それでもクツションの役割は果たせたと思う。

「いや〜ん、どないしょ〜」

女は左の足首を捻挫していたのだ。ウーツとうなりながらさすっている。かなり痛そうだ。

「アンタ」と女。

「ハイッ」とオレ。

「連れて降ろして」
へ。

「後ろ向く」

オレは言われるままにクルリと女に背を向けた。そしてフワツといい香りがしたかと思うと、女の両腕がオレの首に巻き付いてきた。

「落としたらアカンで」

温かい息がオレの頬を撫で、前髪が耳をくすぐり、柔らかな胸が背中に押しつけられる。

「ゴブサタ……」

「なんか言うた？」

「いえ、なんでも」

「ほなしつかり頼むよ、トシローくん」

名前は覚えてくれていたらしい。オレは蚊の鳴くような声でハイと答え、両膝に力を込めて立ち上がったが、思い直して腰を下ろした。そして上着を脱いで女に着せてやった。

「ありがとー。やさしいんやね」

オレは照れ笑いをしながら、彼女を背負い直した。もつともここまでの状況が頭の中で全く整理されておらず、考えて行動なんかできてない。

今はただ女に対していくばくかの感謝の気持ちがあるだけで、怪我をした女をここに置いていくわけにはいかない、ただそれだけだった。

どうにか階段を下りきると、オレたちは地上に戻ってきた。街はさつきより静かになっていた。

「あのお、家はどちら？」

「ないねん……帰るトコ」

えっとオレは首をねじった。女のため息がオレの耳の中で渦巻いた。

「アンタの家、連れてってくれへん？」

7 女の頼み

さすがにオレも開いた口がふさがらなかつた。まだ会って間もない、しかも異性に浴びせる言葉なのか。第一オレはまだこの女の素性も何も知らないときてる。

「帰る家がないって、家出？」

「そんなんちゃうねん。ホンマにないねん」

女の声やさつきより弱々しくなった。

若者たちの乗ったバイクが夜の道をワンワンいわせながら駆け抜けていく。ライダーのひとりがこちらを指さして笑った。一組のカップルがオレたちの横を妙な顔をして通り過ぎていく。まあ判らないでもない。冬空の下、黒いタイツに身を包んだ女をオンブして佇む姿はたまたまどう見たって新宿の街角に馴染まない。酔いつぶれたカノジョを自宅へ送り届けようとしてる、ぐらいが妥当な想像か。「家族の人に迷惑かかる？ そうやったらその辺に捨てて行つて」

「いや、そういう」わけじゃないのだ。悲しいかな、一緒に暮らしていた女に逃げられ、殺風景なアパートの部

屋は今もひっそり静まりかえっているだろう。

逡巡しゅんじゆんしていると、オレの首筋にかかるナマ暖かい吐息がだんだん大きくなってきた。

今度は色仕掛けか？

「あ、あのお」

振り向いて女の顔を覗き込むと、どうも様子がおかしい。もしやと思い、オレは左手と背中で重みを支えながら、右手を女の額ひたいに押し当てた。

尋常な熱ではなさそうだ。女は心持ちアゴをあげ、とろんとした目でオレを見つめた。

「アハハ……やっぱり冬やな。こんな格好で何時間もおったら風邪引かんほうがおかしいわ」

力なく笑うと面を伏せた。

しかたがない。

「オレン家ち、遠いですよ」

「ごめんなあ、世話かけて」

オレは覚悟を決めた。連れて帰るのはいいとして、問題は体力だ。ここ新宿からオレン家まではうんざりするほど距離がある。

初めから女の頼みをすげなく断る気はなかった。この女はどうも赤の他人という気がしない。ナニかがある。それが何なのか、この時のオレはまだ気づいていなかった。

オレが惹ひかれた理由のひとつは、女の言葉だ。

「ありがとう」「ごめん」。

久しぶりに耳にした。同棲していた女が口にしたのを聞いたことがない。もつとも感謝されるようなことをしてやらなかったせいだが。

ちなみに、オレのばあちゃんは「ありがとう」や「ごめん」をととても真情込めて言える人だった。じいちゃんが正反対の性格だったからよけいにそれが際立った。

女との出会いは奇妙なものだったし、いまだ正体は不明のままだが、オレはすでにこの女を信用していた。貯水槽での踊りも、オレの気を削そぐための演技だったんじゃないだろうか。

いつしかオレの足はアパートに向かって歩き始めている。人を負ぶって長距離を歩いたことなんてないから、日頃の運動不足がたたって、すぐに筋肉が悲鳴を上げ始めた。

オレはコンビニを発見するたび、女に温かいドリンクを飲ませてやったり、二十四時間営業のドラッグストアで風邪薬を買って飲ませたりした。オレ自身もたびたび休憩をとったのは当然だが。

薬が効いたせいで、女は背中によく眠った。しかし眠っている人間ってどうしてこう重いんだ。

そうこうしているうちに空が白んできた。時計を見る

ともう四時間歩いてる。体中がガクガクするが、よくが
んばった。自分をほめてやりたい。

オレたちはようやくアパートにたどり着いた。

女は身じろぎしたかと思うと、オレの耳元でこう囁ささやいた。

「ワタシ、志乃っていいいます。よろしくう」

8 携帯コール

「シノさん、ですか」

「今、ババくさい名前やて思たやろ？」

「いや古風だなあと」

「同じことやんか」

オレは褒ほめたつもりだったんだが。

「志こころが及およぶって書くんよ。カッコええやろ」

志乃はムフフと忍び笑いした。オレはとにかく体力の
限界が迫っていたので、彼女には取り合わず、我が家の
鍵を開けた。二階建てアパートの一階一番手前にあるの
がオレン家だ。

シーン。部屋は静かだった。ひよつとして帰って来
てたりするかもとわずかな期待を抱いていたが、本当に
出ていったんだな。軽くため息をつき、オレは志乃を負
ぶったまま靴を脱いだ。そして二間ある奥の部屋のベッ

ドに彼女を降ろした。

「お疲れさまでしたあ」

まるで他人事ひとごとのように言う。志乃は横になると布団にもぐり込み、すぐ寝息を立て始めた。

オレだって睡魔と疲労に襲われまくりだ。もう立っているのもやつと。寝室の引き戸を閉めて、キツチンの床に座布団を適当に並べると、オレも倒れるように眠りに落ちていた。

タンタラタツタツタツタツタン。

タンタラタツタツタツタツタン。

ファ〜〜〜ファファファ〜〜〜ファファファ。

どこからか艶なまめかしい音楽が聞こえてくる。音楽が途切れると、今度は志乃の声がした。

「……おはよー。夕べはゴメンな。店長、何か言うてた？」

携帯か。それにしてもあの着信音はドリフターズ加藤カトちゃんの「ちよつとだけよ」のテーマソングじゃないか。懐かしすぎる。いやそれより志乃のセンスに疑問を感じる。

時計を見ると午前十時。いつもならとうに出勤して、あたふた東京中を駆け回っている頃だ。会社は消え、失職した。まだ実感はないが事実なのだ。これからどうす

ればいいんだろう。

オレは体の向きを変えて、もうひと眠りしようとした。すると今度はオレの携帯が鳴った。

タタタタータータータタター。

『七人の侍』のテーマ。オレはこれを聴くと単純にフアイトが湧いてくるから好きだ。いつかこの映画を超える作品を撮ってやるぞと息巻いていた青春時代を思い出す。オレは頭もとの携帯に手を伸ばした。

「おい菊池、起きてるか？」

テキパキとした声。つぶれた会社でチーフだった河辺かわべさんだ。

「運転手がほしい。すぐ社に来てくれ」

「は、はあ」

それだけで切れた。なにごとだ？

冗談ひとつ言わない、言えないチーフからの緊迫した電話にオレは体を起こした。

が。

あらゆる筋肉、関節がギリリと軋きしみ音をあげた。昨日の今日だ。そりゃこうもなるだろう。

なんとか立て膝をついて、テーブルを支えに背筋を伸ばした。痛みのせいで寝不足も吹っ飛ぶ。

引き戸をわずかに開けて隣を覗くと、志乃はすうすう寝息を立てて夢の中。

オレは鞆の免許証を確認して家を出た。貧乏人のオレはもちろん車など持っていない。しかしつぶれた会社には免許を持つてる人間自体珍しく、オレは重宝がられた。重宝がられ過ぎて、社の車が出動となると、いつもオレが担ぎ出された。

社までは歩いて五分の距離だが、言うことをきかない体のせいで十五分かかってしまった。河辺さんが車の前で仁王立ちして待っていた。

「済まんな、他に運転できるモンがいらないんでな。社はなくなつたが、今いなくなると製作に支障を来すというので、上の会社がオレたちを月末までパート待遇で雇つてくれることになつたんだ」

9 サプライズ

面倒見のいい河辺^{かわべ}チーフの話は非常にありがたかった。期間限定はやむを得ないが、ひとまず次の身の振り方を考える時間はできたわけだ。

「それじゃ頼んだぞ」

チーフはオレの背中をポンと叩いて送り出してくれた。今は亡き社名を脇腹に大書したバンは、もの悲しいエンジン音をたてて出発した。

だが、この日はいつもの十倍ハードだった。仕事内容は相変わらずで、山のような紙束を抱えてスタジオの階段を上下したり、渋滞の道路を迂回するのに神経を使ったり、心身共に休まる暇がなかった。その上昼飯を食う時間もなく、なんとか夜八時にあがれたものの、社用車でアパートに直帰したときは、空腹で歩くのもままならなかった。

アパート裏の路地に車を止めて、塀づたいに歩いてくると、いいにおいが鼻先に漂ってきた。どこかの家族が夕食の膳を囲んでいるに違いない。万年外食生活のオレには毒だ。朝飯昼飯抜き空きっ腹には特にこたえる。

志乃はどうしてるだろう。出がけに「冷蔵庫のものを適当に食ってくれ」と書き置きしておいたが、ろくなものは残ってなかったはずだ。

アパートの表にまわったところで、暗がりに突っ立っていた人影とぶつかりそうになった。大家の綿貫わたぬきだった。住人の顔も二、三見える。

「大家さんじゃないですか」

「菊池さん！」

信楽焼のタヌキそっくりの、頭二つ低い綿貫の顔が、オレを不安そうに見上げた。

「あ、あんた、知ってるのかい？」

「何がですか？」

「あ……あれだよ」

綿貫が指さしたのはオレン家だった。玄関の扉が全開になっており、にぎやかなというより騒々しい声があった。に響き渡っている。と、若者がふたり飛び出してきた。目を丸くしているオレや綿貫を後目しりめに、彼らは自転車にまたがって表通りに消えた。

オレは狐につままれた思いで玄関へと近づいた。換気扇から湯気が立ち上っている。さつき裏でかいだにおいはこれだったらしい。

扉越しに覗くオレの目に映ったのは、忙しく動き回る二十歳前後の若い女たちだった。十人以上いる。まぢまぢのエプロンを掛けた彼女らは鍋の味見をしたり、野菜を包丁で切ったり、皿を並べたりと、かいがいしく立ち働いている。

彼女らはオレに気づくと、号令をかけたように頭を下げた。

「おかえりなさい」

そう言われたって、見知った顔はひとつもない。中のひとりが奥に向かって叫んだ。

「姐ねえさーん。カレシのご到着ですよー」

ご到着って、ここはオレン家だ。違うのかな。判らなくなってきた。オレの頭はついに破綻を来たし、その場にへたり込んでしまった。

「大丈夫ですかあ」「つかまってく下さい」

口々に呼びかけてくる女たちに支えられて、オレは靴を脱ぎ、キッチンの椅子に腰掛けさせられた。

それからの半時間、オレは彼女らの動きをただ見守っているだけだった。さつき出ていったふたりの男も帰ってきた。どうやら買い出しに行ってたらしい。そしてようやく一段落ついたのだろう。姐さん失礼しますーと合唱し、志乃がありがとなあ〜と応じると、全員きれいに退散した。

テーブルの向かいには、松葉杖をつきながら志乃が着席した。目の前には、この部屋ではかつて見たこともない家庭料理が並んでいる。

「へへへー。めっちゃビックリしてる？」

志乃はニコニコ笑っている。いつの間にか、無断でオレのTシャツに着替えてる。

「あのコらカワイイやろ。劇団の後輩やねん」

10 ご馳走の山

「劇団って、アンタ女優さん？」

「みたいやったヒト」

「みたいって??？」

志乃は眉間にしわを寄せ、両手をクロスした。

「あか〜ん、質問ストップ。料理冷めてまうがな。先に食べよー」

そうやって箸を手に取ると、いただきまくすを高らかに宣言し、山のようによそつたご飯をかき込み始めた。オレも空腹の絶頂だったから考えるのは後回しにして頂戴することにした。

ふと目を上げると、キッチン向こうの窓ガラス越しに大家の綿貫わたぬきが手を振っている。すっかり忘れていた。

「ちよつと待ってて」

「どないしたん」

箸をくわえたまま振り向いた志乃は、

「ギャツ！ 覗き魔！」

「ち、違う。大家さんだよ」

「スケベな大家」

「そうじゃないって。この部屋で知らない人間がワイワイやってたから心配して見に来たんだよ」

オレは玄関から顔を出して、綿貫に頭を下げた。

「すいません。知り合いの友人たちが遊びに来てただけなんですよ。ご心配おかけしました」

「本当かい。ならいいけど、ご近所さんにあんまり迷惑かけないでよ」

小心な綿貫は一応ホツとしたようだ。

オレの頭の上に志乃が顔を出した。

「大家さんも一緒に食べてく？」

綿貫はギョツとした顔を見ると、心臓のあたりを押さえて一歩後退した。

「いえいえ、それには及びませんので、ユキコさん……じゃないんだね」

そう言うとは度も頭を下げながら、闇の中に消えていった。

「えらい腰の低い大家さんやねえ」

その分、クチが軽いから、明日には「オレのところ
新しいオンナがいる」とアパートじゅうに触れて回るだ
ろう。やれやれだ。

「ビール飲もうよ、ビール」

志乃は痛めた足をうまく庇かばって冷蔵庫の前に立つと、
缶ビールを取り出してテーブルにドンと置いた。俺たち
は互いにプルタップを開けた。

「かんぱい」

それからは飲み食いに集中した。じっさい料理は心を
奪われるほど美味だった。家庭料理とはこういうのを指
すんだろう。オレはなぜか大阪の実家を思い出して、不
覚にも涙をこぼしてしまった。

オレと志乃はすべての料理を平らげて、ようやく話を
する余裕ができた。オレはまず礼を述べた。

「ありがとう。ごちそうさま。こんなうまい料理、何年

ぶりだろう」

「おいしかったやろ。ワタシら劇団やってる子らってひとり暮らし多いし、バイトも忙しいから栄養め^{かたよ}つさ偏るねん。そやから『おふくろの味研究会』ちゅくの作つてん。モットーは値段手頃で手間いらず。味よし見た目よし栄養よし。結果は自分よし。もう三年やってるから成果出たと思うわ。おいしいモン食べると明日もガンバローって気になるやろ。ほら、ひとり暮らしって病気になったとき一番つらいやん？ そんなときはみんなで料理作って持って行ってあげたりするねんで。そんで今朝友達に電話したらワタシが怪我したこと広まってしもて、今夜来てくれやったんよ。アタシこれまで医者いらん人やったから、初めての経験。もくお目目うるうる、チヨく感激イ♡」

大きな口にビールをグビつと流し込み、息をプハーつと吐き出す。そうとうな呑助^{のみすけ}と看^みた。

「ちよつと待って志乃さん、アンタまだオレの質問に答えなくてない」

しかし志乃は髪を大きく揺らしながら振りかぶると、直球さながらの鋭い視線を投げつけてきた。

「ユキコさんて誰？」

うぐつ。

「さつき、ぽんぽこりんの大家さんが言うてはったやん。ね、ね、誰なん、ユキコさんて」

しつかり聞いてたか。

「……同棲してた女だよ」

「エエッ！ そんな人おったんや。見かけによらんねえ」

志乃は急に目を輝かせ始めた。

「もう出て行ったよ。昨日」

「そっかー。それで落ち込んでたんや、アハハ」

笑ってほしくない。

「これってユキコさんの字やったんかあ」

志乃が手に持っていたのは、あの書き置きだ。

「サヨナラ。突然だけど」

「読むなーっ！」

オレは荒々しく奪い取ると、丸めて捨てた。

「なんかさー、部屋の中がミョーに広いなあって思ってたんよ。寝室の畳かて日焼けしてないところ、クツキリ残ってたし……ワケ全部話してみ」

すでに新宿のビル屋上で醜態……というのか、見られていたオレとしては強く反論に出られない。がっくり頭を垂れると、オレ自身の話をさせられるハメになった。

大阪の芸大に入って、映像に関わる仕事をしたかったのに、就職した先はアニメ会社の下請けで、ずっと使いつつ走りだったこと。その会社が昨日つぶれたこと。同棲していたユキコとはすれ違いの連続で、とうとう愛想を尽かされたこと。

「ビルに上ったのは、いつもオレを見くだして東京つて街を、逆に見おろしてやりたかっただけなんだ」

さすがにダイビング未遂については言えない。しかしそのときの気持ちは思い出すことができた。

ユキコってどんな顔してたっけ。もう長いこと寝顔しか見てなかった気がする。彼女に去られて味わった消失感、喪失感、そして身を切られるような寂寥せきぼくとした気持ち。当たり前のように居た者が居なくなるという違和感。のほほんと生きてきたオレにとつてこれほどの衝撃はかつてなかった。オレは彼女を、ユキコを愛していたんだろうか。今となつてはそれすら判らない。

また涙があふれてきたので、志乃に見られないよう顔を伏せた。そして自分の感情を打ち消すように話を続けた。

今朝、河辺チーフの電話が入って、ひとまず今日は仕事ができることになった。ただその後は未定だ。今夜は社の車を持って帰っていて、明日もそのまま出かけるつもり。

「大変やったんやねえ。お疲れさま」

志乃は新しい缶ビールを開け、オレにどうぞと差し出した。オレは受け取り、

「それはそうと、志乃さんの話を聞かせてよ」

缶を両手に包み込みながら、ようやく聞く側に立った。

「ワタシの話？ べつにオモロいことないよ」

「オレのだって面白くない」

「まあ、ねえ……」

志乃はおつまみの袋を開封すると、皿の上に盛り、ひとつまみ頬ばった。

「ワタシは東大阪出身で、昭和四十九年生まれ」

「四十九年？ じゃあオレと一緒にだ」

「ワタシはクリスマス月の月」

「オレ三月。じゃあ学年は一個違いか」

同い年と聞いて少しホツとした。ようやくこの正体不明の女が現実味を帯びてきた。

「大阪の某私立大学におったときから演劇やってて、せっかくやからメジャーデビューしたろう思て上京したんよー。でも世の中甘ないねー。受けるオーディション片っ端から落ちたわ。小さい役でもええからチヨードイして泣きついてもアカンかったね。ワタシってバタクさい顔してるやん。それで使いにくいんかなあて悩んだりして。結局、芽が出んまま、この歳になってしもた」

12 座長の指摘

年齢か。根無し草のような生活を送ってるうちに、気がつけば三十代。オレも志乃も、それぞれ人生の岐路に立っているわけだ。

「アンタって関西弁、出エへんねんなあ。うらやましいわ」

志乃は色白の顔をビールでほの赤くしている。

「でもさあ、志乃さんはあんなにたくさんの後輩に慕われてるんだねエ。姐さんねえ姐さんって。感心通り越して尊敬するよオ。オレなんて、大阪いるときも、東京来てからも、友達なんてひとりもできなかつたからなア」

「女にも逃げられたしなあ」

「るせエ。つくしよー」

オレもアルコールが回って呂律ろれつがかなり怪しくなってきた。彼女もかなりデキあがってるようで、二の腕を枕にしたまま、おつまみの山に指を突っ込んで遊んでいる。

「ワタシもさあ、昨日さあ」

「んー」

「おまえは役者に向いてない」。座長にハッキリ言われてん

「……」

「〃今後は役者としては使わん。劇団に居たいなら裏方に回れ！」て。一旗揚げたるゝとか有名になって故郷にニシキゴイ飼うたるゝて思てたワタシにとって、辞めてまえ言われるのと一緒や」

オレは訂正もせず聞いていた。

「昨日は厄日や、天誅殺やゝ」

志乃はイヤイヤするように体を揺すった。すると志乃の目から大粒の涙が……ではなく、鼻の穴から鼻水がツーツと垂れた。

オレはティッシュを箱ごと無言で差し出した。志乃も無言で受け取り、チーンと鼻をかんだ。

「バイト先でもなあ……焼肉屋でバイトしてんねんけど結構かわいがられてるんやで。威勢がエエ、江戸っ子みたいな上方ネエちゃんて……」

今朝の電話はそれだったか。

「いつでも社員にしたるて店長も言うてくれるけど、やっぱり夢は〃ハリウッド女優〃やんか」

やんかと言われてましても。オレは相槌を打って、できるだけ優しい口調で話しかけた。

「劇団なんて、他にもあるだろう？」

オレの問いに、志乃は視線をさまよわせた。

「……ううん。そやないねん……弱点」

「弱点？」

「ていうのかなあ。いうんやろなあ。座長が“向いてない”言う理由、ようわかるんや。ワタシも氣イついてたから」

「理由って……演技が上手うまくないってこと？」

「結局はそうなんやろうけど、座長はウマイこと表現してくれはったわ」

志乃は、飲み干した缶ビールを持ち上げた。

「“空っぽ”」

「え……」

「なんぼ科白しゃべってても、演技してるつもりでも、全然響けへん、全然伝わってけえへん……空っぽだそうです！」

つまりは、大根ってことじゃないか。

「“オマエは自分が嫌いだろ。だから演じてるつもりでも、役柄を受け止めず、逃げてばかりいるんだ”やて。言われた瞬間、座長に向かって、鋭いっって叫んでしもた。それでまた叱られたわ」

演劇の専門的なことは判らない。けれど、さぞかしシヨツクだったろう。虚うつろな役者……。

「ずぼ、ずぼ」

「……凶星？」

「そう、それ！　ワタシかてそれくらい指摘されんでも判ってたっ。でも認めたくなかったん」

志乃は唇を曲げて、嗤わらった

「ここまでかなく、夢見んのも。捻挫した足見せたら、座長のヤツ、ホレ見ろて笑いよるやろなあ。昔やったらあれぐらいの高さ、平気で飛び降りれてんけどね……」

13 お告げ

オレは今になって、志乃が心底落胆していることに気がついた。一途に夢をめざして、自分を信じてがんばってきたというのに、座長のひと言でその夢を木こっ端ぱ微塵みじんに粉碎されたのだ。これで落ち込まなければ人間じゃない。

志乃の口から吐息が漏れた。なんとか彼女をなぐさめてやりたいが、考えてみれば今のオレにそんな資格はない。ひとまず彼女の言葉をそのまま受けて答えるしかなかった。

「足首、まだ痛い？」

「うん」

「松葉杖はどこから持ってきたの？」

「これも後輩のあの子らが持ってきてくれてん」

「へえー。至れり尽くせりだなあ」

「えへへ」

志乃は少し笑い、つられてオレも笑った。

「そういやさ、昨日初めて会ったとき、妙なお告げみたいなことを言ってたろ。あれってどういう意味？」

「昨日……」

「たしか“運気は今日から上昇する”とかって」

「うん、言うた言うた」

「あと“西を指せ”だとか」

「そうそう」

「もしかして、でまかせだったのかな」

「そんなことあらへーん」

志乃は枕にしていた右腕から頭をもたげた。怒らせてしまったかと身構えたが、何事もなかったように今度は左腕を枕にしてテーブルに伸びた。

「ワタシのお告げって、めっさ当たるんやで。知らんやろー」

「そりゃ知らないよ」

「よう聞きや。ワタシの勘って天気予報より当たる確率高いんやで」

比べるものが微妙だ。

「今までで一番スゴいのがなー、劇団の看板役者の男優さんがな、飛行機で北海道へ移動するいう日に、ワタシ、飛行機が落ちる夢見てん。そんで必死になって止めたんよ。ギリギリでも間に合うんやったら新幹線で行けーちゅうて」

「うんうん、それで」

「それでな、ワタシが後輩らと一緒にになって説得したもんやさかい、男優さんもやつと思いい止まりはってん。そしたらな……」

ごくり。

「エンジントラブルとかで飛行機、途中で引き返しよつてん。乗ってたら絶対に間に合ってなかったわ。あとでエライ感謝されたでー」

……落ちなかったのか。

「それはすごいよ。ホント、すごい」

志乃は得意満面だ。彼女が気を良くしたのならそれでもいいや。

「それじゃ、オレの運も本当に開けるのかな」

「もう開けてるやん。ワタシと会^おうたし」

「ああ……たしかにそうだな。これは認めざるを得ないといったところか」

「ふふふ。ふ、ふわわわわ」

志乃は大きな口を開けて欠伸^{あくび}した。時計を見るともうかなり遅い。

「そろそろ寝たら？」

「うん……なあ、足の怪我が治るまで、ここに居てもかまへん？」

「ああ、いいよ」

オレはできるだけ、さりげなく答えた。

「お風呂、さつき沸かせて入らせてもろたよ。アンタも入ったら」

「うん、そうする」

オレは湯船に浸かりながら、妙に満ち足りた気分になつていた。昨日はすべてを失つて目の前が真っ暗だつたはずなのに。現金だなオレって。でも今夜はゆっくり眠れそうだ。

しかしその夜、引き戸の向こうから聞こえてきた志乃の恐ろしげな声に叩き起こされてしまった。

14 寝言

「ごめんな、ごめんな」

志乃の絶叫は冬の静寂しじまを切り裂いて、泥のごとく眠りを貪むさぼっていたオレの目を一瞬にして覚醒させた。

後で考えれば、さほど大きな声ではなかったろう。アパートの薄い壁越しにお隣さんの眠りまで妨げるほどではなかった。しかし問題は音量より声質だ。隣室にいたオレの心臓を驚掴わしづかみにした、というか心胆寒しんたんさむからしめる声だったことは間違いない。

相変わらず志乃にベッドを占領されたままだったオレは、キッチン脇に置いたソファの上でガバと跳ねは起きた。

しかし運悪くキッチンテーブルの角に頭を打ち付け、フランスを崩したままソファから滑り落ちると、置きっぱなしの掃除機に膝をイヤというほどぶつけた。この時ほど狭いアパートを呪ったことはない。

人間の順応性とは恐ろしいものだ。長年の安アパート暮らしは、どんな状況においても大声を抑制する機能をオレに付加した。とはいえ、頭と膝を抱えて涙を流しながらウンウン唸ることだけはいかんとも避け難い。

オレは引き戸を少し開いて、志乃の様子をうかがった。窓の隙間から差し込む外廊下の電灯に照らされて、彼女は虚空に伸ばした腕を布団の上に落とすところだった。しばらく観察を続けたが、どうやら夢のクライマックスは越えたらしい。後輩さん大挙襲来の後だから、あまり寝言を連発されるとさすがにご近所からの苦情が心配になる。

オレは戸を閉めようとしたが、思い直して志乃の眠る部屋に入った。そして布団の上に投げ出したままの彼女の両腕を布団の中に入れてやった。

志乃の寝顔からは「ごめん」と謝らねばならないような夢を想像することはできない。いかにも気持ち良さげに寝息を立てている。

オレは彼女の左手をつかんだまま、しばし寝顔に見入っていた。見入りながら思い出すのはユキコのこと

だった。背中合わせで寝ることはあっても、ゆっくりと寝顔を拝んだことはついぞなかったかもしれない。いまさら後悔しても遅いが。

ふと異物感を感じて、つかんでいた志乃の手首の裏を光にすかしてみた。かろうじて目に付く程度だが、腕と直角に傷らしき痕がある。

リストカット。ためらい傷。

軽々しく断言することはできないが、そんな切り傷に見えないこともない。ひよつとすると、志乃の苦悩は演劇に関するだけじゃないのかもしれない。

オレはそつと腕を布団の下に滑り込ませてやった。すると彼女は、僅かに体をねじったかと思うと、再び口を開いた。

「猫……猫がおるで……よお見してみ」

背筋に冷たいものが走った。反射的に部屋の中を見回したが、猫なんてどこにもいない。それが寝言だと気づくまで十数秒を要した。

寝言はそれで終わりだった。さすが女優志望だ。眠つていても真に迫った演技。オレは改めて感心した。これでどうして鹹クドになるのか理解できない。

まあ猫の登場する夢なら大丈夫だろう。オレは一人合点して部屋を出ると、静かに戸を閉めた。

翌日も早朝出勤。まだ歩行困難な志乃も、後輩が置いていった食料の山があるので出かけないで済む。オレもおこぼれ頂戴ちようたたいと、食パンを一枚だけくわえて、眠る志乃を残し、家を出た。

睡眠と食事が満ち足りることのなんと大切なことか。オレは痛感した。この日の仕事ぶりには我ながら余裕が感じられたのだ。河辺かわべチーフにも「顔色が良くなったな」と声をかけられ、オレは気を良くして配送車のアクセルを踏んだ。

夕刻。あと一軒回れば仕事は終わりだ。オレは速度を落とさず、街角を曲がった。そのとき小さな三毛猫が一匹、車の前に飛び出してきた。

15 震える手

東京は猫が多い。特にオレの行動範囲で見かける野良猫の数はハンパじゃない。彼らが悠然と人中を徘徊はいかいする姿や、徒党を組んで上げる鳴き声などはすっかり町の日常に溶け込んでいる。財布を持ってお使いに出かける猫や、切符を買って電車に乗る猫がいたって誰も驚かないんじゃないだろうか。

この日も朝から何匹もの猫を目撃した。路地に入つて二匹三匹、回った先で動画を受け取ってる最中に足許

にまとわりつく奴、車に戻ってみるとボンネットで日向ぼっこしてる集団などなど。

普段なら気にも止めないそんな猫たちの姿を、今日はやけに意識してしまう。言うまでもない、志乃の寝言のせいだ。

配達の仕事はまさに分刻みだ。需要に供給が追いつかないアニメ界において、しわ寄せはすべて現場の人間に襲いかかってくる。現にオレの担当作品を手がけるスタジオでは、追い込まれ、それでもなお黙々と鉛筆を走らせるアニメーターたちの亡霊のような青白い顔を垣間見ることができる。IT化の波は確実に押し寄せているとはいえ、まだまだ紙に手描きというスタイルは揺るぎなく存在する。「パソコンなんぞで微妙な動きが描けてたまるか」という意見もあり、それはそれで説得力があると思う。

しかし作画の現場が高い完成度を求めれば求めるほど、しわ寄せは二倍三倍となってその後を引き継ぐ者の肩にのしかかる。原画マンが精魂込めて描きあげた「原画」を持って、「原画」の間を埋める「動画」を担当する下請けスタジオにオレは車を走らせる。行った先では既にながっている「動画」の束を抱えて戻ってくる。

二十一世紀の現代、この役割はもはや旧弊以外の何物でもない。本社も来年には現場以外をすべてコンピューター

タ化する計画があるらしい。原画や動画も高品質でデジタルデータにして、やりとりするという。

……うーん、能書きが長くなってしまった。とにかく今は動画を一刻も早く配達する、それがオレの急務だ。猫などに気を散らしている場合じゃない。

とはいえ頭の中で呪文のようにループする志乃の寝言を振り払うことができない。おかげでこの日の配達はいつもの二割増しの時間が掛かってる。

それでもなんとか機転を利かせた道路選びでロスを解消し、夕方、最後のスタジオには思ったより早く向かうことができた。だから三毛猫が車の前に飛び出してきたときは大層驚いたが、あわてずに車を急停止することができた。

三毛猫は全身の毛を逆立てて驚きを表現し、この世のものとも思えない叫び声を残して、一目散に路地へと飛び込んでいった。しかし次の瞬間、オレは猫に負けない驚きで全身鳥肌を立てていた。

猫に一拍遅れたタイミングで、子供が道路に飛び出して来たのだ。

「……………!!」

子供は自分が追いかけてきた猫の態度が、突如“豹”変したことに戸惑ったらしく、道の真ん中つまりオレの車の前で足を止め、ゆっくりとオレの方に目を向けた。

小さな眼に映るオレはよほど妙な顔をしていたのか、小首を傾^{かし}げてしばらく見つめていたが、やがて猫の消えた路地へと駆け込んでいった。

エンジンの振動が身体を揺らせるのに任せて、オレはしばらく空^{くう}を睨^{にら}んでいたが、やがて後続車の警笛に我に返り、あわてて車を発進させた。

訪問先のスタジオに乗り付けたものの、オレはハンドルから震える手を離すことができなかった。

志乃の寝言はこのことを指摘していたのか。

志乃は夢の中で未来を予言したのか。

少なくとも、彼女の御託宣がなければ、今日オレは確実にあの子供をはねていただろう。

志乃……アンタはいったい何者なんだ？